



### 国葬反対の宣伝行動

高知憲法アクション主催の集会や宣伝行動が、8月3日県庁前を皮切りに、9月は毎週土曜日(3、10、17、24日)はりまや橋四銀前、20日夕方中央公園北口 27日早朝県庁前で行われ、9月3日には宣伝後、商店街を通り市役所前までのデモ行進が行われました。高退協の会員も、プラカードやパネルを持って参加しました。テレビでも高退協勇士の映像が放映されました。



7月に岸田首相が安倍元総理大臣の国葬を発表したとき、「本当にと驚き、「岸田さん大丈夫？」と言いたくなりました。安倍さんにとって私は、「こんな人たち」の仲間です。「あんな人を国葬にするなんて」という低次元の感情論で、単純に「国葬に税金を使うならウクライナの支援に回せ！地球儀を俯瞰する外交を標榜してきた安倍氏も喜ぶ！」と憤っていました。

当初は、関心が薄そうに見えた国葬問題は、反対の声が高まる中、憲法が保障する思想・良心の自由の侵害ではないかという議論も起きました。「内心の自由」はデリケートな概念で、普段の生活の中ではあまり意識されることはないかもし

### 憲法への思い⑤ 父がぼそつと 「平和はえい…」

倉橋伸香



れません。しかし、自分の内心に無関心でいれば、私のように、薄ぼんやり生きていく人間は、いつの間にか人権を浸蝕されていくのではないかと怖いです。国葬終了後の世論調査で「国葬はよくなかった」と答えた人が6割もいました。日本の社会は、まだまだ健全なのかと思いつながら、あの凶弾が切り裂いて見せた闇の深さには慄然とします。

とここで、私は以前から、改憲を声高に叫ぶ政治家の、憲法の学びと憲法観に興味がありました。私の場合、中学では、生徒の意見発表を大事にしてくれる授業に出会い、高校では、熱心に「朝日訴訟」について教えてくれた先生がいました。

そして、平和について考えた忘れられない思い出があります。1964年東京オリピックの閉会式の夜のことです。私は小学6年生でした。家族でテレビで見ている、世界中の選手たちが、混然となつて、流れる川のようにトラックを回り始めたとき、父がぼそつと「平和はえい…」みたいなことをつぶやきました。父は戦争に行くことはなかったのですが、母の話では、飛行兵を夢みる軍国青年だったらしいです。父はその翌年急逝し、その時の心情を聞くことはできなくなりました。寡黙で会話らしい会話をした記憶のない父でしたが、平和への思いは引き継いだと思っています。ここ数年、オリピックの閉会式を見ることはなくなりましたが、4年(昨年は5年)ごとに、あの夜のことを思い出すのです。

最後に、みなさんにもう一度「憲法前文」を読むことをお勧めします。

この原稿を書くにあたり、私も久しぶりに読んでみました。

世界は今、「パンドラの箱」を開けてしまったような様相で、私たちがどのような未来が待っているのか想像ができません。しかし、平和であることは、ウクライナのことでもわかるように、私たちの暮らしの基本です。日本国憲法の精神を深く理解すれば、軍拡などという選択はないはずで、政治家のみならず、みなさんに、「もっと憲法をお勉強して」と言っておきたい。老女のたわごとではあります。

話をした記憶のない父でしたが、平和への思いは引き継いだと思っています。ここ数年、オリピックの閉会式を見ることはなくなりましたが、4年(昨年は5年)ごとに、あの夜のことを思い出すのです。